

海が好き

今給黎教子

一九九二年（平成四年）七月十五日、錦江湾の風に乗って、一隻のヨットが鹿児島島の港に帰ってきました。二百七十八日間をかけた※単独無寄港世界一周。日本人女性では初となる快挙です。そのヨットの名は「海連」。そして、この「海連」にたった一人で乗り込み、世界一周を成し遂げたのが、鹿児島島の海洋冒険家、今給黎教子さんでした。

教子さんは、一九六五年（昭和四十年）一月二十一日、日置郡吹上町（現在の日置市）で生まれました。吹上町には、南北に十キロ以

【今給黎教子さん】



【単独無寄港世界一周】

一人だけが乗ったヨットで、どこの港にも寄らずに世界一周をすること。

上じょう続つづく吹ふ上あ浜げがあり、教き子こさんは、美び術じゆつの教き師しをしていた父ちち親おやの連むらじさんに、よくそこに連つれて行いってもらいました。スケツチをする父ちちのそばで、砂すなにまみれて海うみで楽たのしく遊あんだ子こどもの頃ころの思おもい出でが、今いまの教き子こさんの、

「海うみがだい好すきで、海うみを見みると、ワクワクドキドキしてたまらなくならるんです。」

という、海うみへの強つよいあこがれを、はぐくんでいったのでしよう。

そんな教き子こさんは、中ちゅう学がく時じ代だいに、自みづか分の進しん路ろを左ひだり右みぎする本ほんに出い会かいいます。ロビン・リー・グレアムという人ひとが書かいた、『※ダブ号ごうの冒ぼう険けん』です。十六歳さいの少せう年ねんが、たたった一ひと人りでヨットにのり世よ界かい一いっ周しゅうをした、実じつ際さいの記き録ろくです。五ご年ねん間かんをかけた航こう海かいの中なかで、様さま々々な体たい験けん

【関連年表】

一九六五年 誕生たんじょう

一九七一年

伊い作さく小しょう学がく校がく入い学がく。

一九七七年

紫むらさき原きはら中ちゅう学がく校がく入い学がく。

一九八〇年

錦にしん江がわ湾わん高こう校がく入い学がく。

一九八三年

鹿か児こ島しま市し役やく所じょに就しゅう職しやく。

一九八八年

太たい平へい洋やう单だん独とく往わう復ふく成せい功こう。

一九九二年

单だん独とく無む寄き港こう世よ界かい一いっ周しゅう成せい功こう。

功。

を重ねて成長せいちょうしていく少年の冒険がおもしろくて、夢中むちゅうになつて読み返しました。やがて、その様子を想像そうぞうするだけでは満足まんぞくできなくなり、太平洋を見るために※佐多岬さたみさきへ出かけ、一晚ひとばん中海を眺めながていたこともありました。教子さんの海へのあこがれは、どんどんふくらんでいったのです。

高校進学も、ヨット部があるという理由で、錦江湾高校を選びました。入学式当日にヨット部に入部すると、教子さんの高校生活はヨット一色になっていき、三年生の時には、高校総体そうたいで三位いに入賞にゅうしょうするほどの実力をつけていました。ヨット部では、その速さと技術ぎじゆつを競うきそヨット競技きぎょうに全力で取り組みましたが、一方で、広い海をゆつたりとヨットで航海したいという、中学時代からの夢ゆめも、消え

【ダブ号の冒険】

アメリカの少年ロビンが、一九七〇年にヨット「ダブ号」で達成した、単独世界一周の記録。

【佐多岬】

肝属郡南大隅町きもつぎんみなみおすみに位置し、九州本島の最南端さいなんたんにあたる岬。



ることはありませんでした。

やがて高校三年生になり、クラスメートのほとんどが大学進学を希望する中で、教子さんは、鹿児島市役所への就職を希望します。

実は、鹿児島市役所にはヨット部があり、それなら卒業後も、夢へ向かってヨットを続けられると考えたのです。無事に鹿児島市役所に就職した教子さんは、市役所の仕事をしながら、ヨットでの航海の準備を進めていきました。そしてそれから約五年後の一九八八年（昭和六十三年）、教子さんは、日本人女性としては初めてとなる太平洋単独往復に挑戦し、成功します。教子さんの前に『ダブ号の冒険』の世界が、どんどん広がっていきました。

【海連垂乳根号】



一九八八年（昭和六十三年）の太平洋単独往復で使用された。鹿児島から太平洋を横断し、サンフランシスコまでを往復した。

「今度は世界一周をしたい。しかも、無寄港で。」

新しい究極きゅうごくの冒険への思いを強くして、教子さんは準備を始めました。十か月もかかる長い航海を、たった一人で、港に寄ることよもせず続けるのです。ずっと海の上で暮らすのですから、十分な準備と手配ひつようが必要です。どんな船がいいのか、何をどれくらい積み込こめばいいのか、様々な分野の専門家せんもんかや友人たちと語り合い、ヨットをさがしてフィンランドにまで行きました。

ヨットを決めても、準備は終わりません。長い航海に耐えらたれるようにヨットを強化しなければいけませんし、また、航海のルートを決めたり、エンジンの修理しゅうりを勉強したり、テスト航海をしたりと、やるべき事は山のようにありました。けれども、教子さんにと



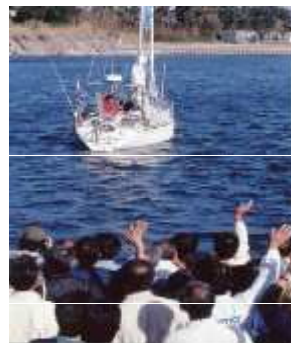
って、この、サポートチームの仲間たちと一緒に準備をした
一年ほどの時間は、とても充実じゅうじつしていて楽しいものでした。

一九九一年（平成三年）十月十二日、多くの人たちの協力きょうりょくや応援おうえん
をもらって、ついに「海連」は、錦江湾から世界の海へこぎ出して
いきました。見送る人たちの姿すがたがだんだん小さくなって見えなく
なると、さびしさがこみ上げてきて、胸むねがしめつけられました。そ
れでも自分で決めて始めたことです。

「もう後戻りあともとどはできないんだ。あとは行くのみ。目指すものは世界
一周なんだ。」

教子さんは、自分自身に強く言い聞かせました。

単独無寄港世界一周の旅は、厳きびしく、文字通り命がけの旅でした。



【出発時の今給黎さん】

（南日本新聞 平成三年
十月十二日）

南太平洋の真ん中では、サイクロンの暴風雨に飲みこまれてしまいました。風速四十メートルの風と十メートル以上の大波に、小さなヨットはもみくちゃにされました。あつと思つた時には、ヨットは横転していました。叫ぶ間もありません。船に積んでいた様々な物がスローモーションのように宙を飛び、そして、次の大波を受けたヨットは大きくゆりもどされて、なんと元に戻っていました。

また、アルゼンチン沖の大西洋上では、三日間にわたって、氷山との戦いが続きました。たとえ小さな氷山でも、ぶつかったとたんに「海連」は沈んでしまいます。また、冷たい海に落ちてしまえば、ひとたまりもありません。大小の氷山に囲まれながら、教子さんは、三日間も眠らずに、ひたすら氷山をよけて航海しなければなら

【世界一周の航路】



【考えてみよう】

皆さんの経験の中で、自然の力の大きさを感じたことはないだろうか。

りませんでした。

さらに、舵が故障したり、※ウインドベーンがこわれたりしてしまいます。あらゆるトラブルや困難を、工夫と勇気、そしてサポーターチームの協力で乗りこえて、出港から二百七十八日目、とうとう教子さんは、鹿兒島の海に帰ってきました。距離にして、実に五万四千キロの一人旅でした。その時の思いを教子さんは、著書の「風になった私―単独無寄港世界一周二七八日の記録」の中で、こう書いています。

「『やったー！』思わずガッツポーズが出た。とうとう世界一周したんだ。終わったんだ。わたしはこの愛するヨット『海連』で世界の海をまわってきたんだ。ここは錦江湾、9カ月前に出航した

【ウインドベーン】

風の力を利用して船の舵（かじ）を操作する装置。

【「海連」の構造図】



港だ。そこにこうして帰ってきた。長い旅だった。つらい旅だった。

すべてのものに感謝―海・風・太陽、はげましてくれた仲間・家族、そして『海連』、ありがとう!」

港では、お母さんの海子さんをはじめ、たくさんの人々が、教子さんの帰りを待っていました。港は、たくさん笑顔で満ちていました。

「よくやったね。強かったね。」

教子さんは海子さんと固く抱き合い、無事と成功を喜び合いました。

教子さんは今、「※海の学校」の校長先生として、鹿児島の子ど

【ゴール瞬間の今給黎さん】



(南日本新聞 平成四年
七月十六日)

【海の学校】

今給黎さんが主催している、子どもたちに海の素晴らしさを学んでもらうための自主団体。

もたちに、海のすばらしさを伝えていきます。教子さんからみなさんへのメッセージがあります。

「鹿児島は、美しい海や山に囲まれ、その恵みを受けています。その鹿児島良さを知ってほしい。海のおもしろさを知ってほしい。そして、世界は広いということを知ってほしい。

ワクワクする気持ちで海を楽しんでくれるように、わたしも大好きな海を楽しみながら、そのお手伝いをしたいと思います。」

海が大好きな教子さんは、中学生のころに読んだ『ダブ号の冒険』へのあこがれを、『海連号の冒険』として実現しました。教子さんの挑戦は、今も多くの子どもたちに、勇気と夢を与え続けています。

【考えてみよう】

世界一周への挑戦を通して、教子さんは、どんなことに気付いたのだろうか。

